

入来牧場における実習教育効果向上サイクル

○石井大介^{A)}, 片平清美^{A)}, 松元里志^{A)}, 富永輝^{A)}, 柳田大輝^{A)}, 飯盛葵^{A)}, 大島一郎^{B)}

^{A)}鹿兒島大学農学部附属農場入来牧場, ^{B)}鹿兒島大学農学部附属農場

【背景/目的】

われわれ技術職員には、現場での実習教育を通して各専門分野における知識を定着させると共に、基礎的な技術を習得させることが求められている。鹿兒島大学農学部附属農場入来牧場(以下、入来牧場)では、年間延べ34日間の宿泊および日帰り実習を実施しており、合計約180名の学生が実習を受講している(第1表)。現在、各実習のカリキュラムに沿って実習教育が行われているが、実習教育効果の高い指導法については具体的に検討されていないのが現状である。入来牧場では、実習教育効果向上サイクル《①実習プログラムの確認および各実習項目の担当者決定②実習の実施および記録(実習中のビデオ撮影、最終日のアンケート調査)③実習終了後のビデオ、アンケート確認および改善点の話し合い④次回実習へ向けて準備》を繰り返し行うことで、実習における問題点の抽出や職員の指導スキル向上を図り、実習教育方法の改善を行っている。本発表では、入来牧場で実施している実習を例にとり(農場実習Ⅰ)、平成24年度から平成28年度までのアンケート結果について、前年度の指摘事項を改善できているか、学生の実習満足度評価(秀・優・良・可・不可の5段階評価)はどのように変化しているかについて検討した。

【結果/考察】

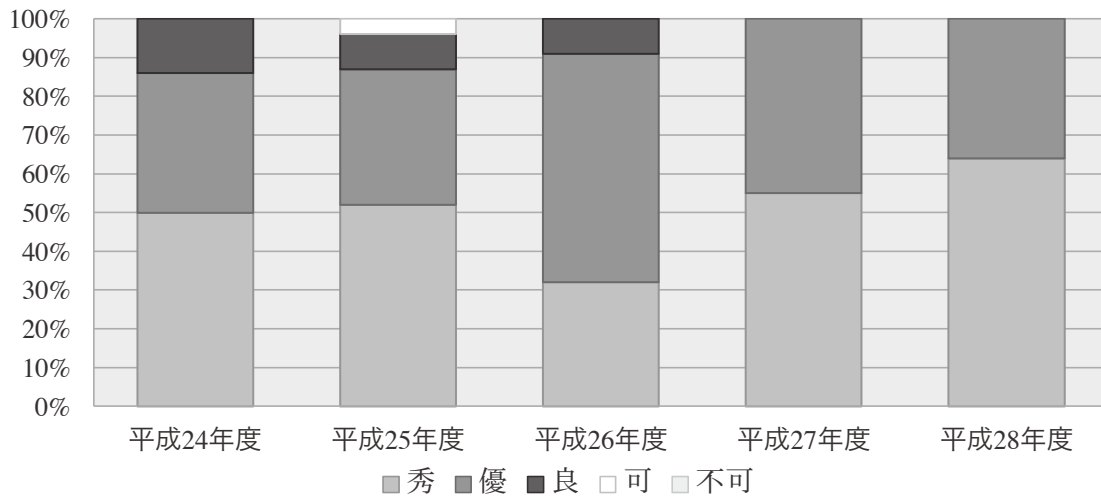
平成24年度から平成28年度に実施した農場実習Ⅰのアンケートには『学習意欲が出た』『分かりやすかった』等実習を終えて満足したと思われる意見が大部分を占めていたが、一方で職員の実習方法に対する指摘事項も記載されていた。実習教育効果向上サイクル開始初期の平成24,25年度には『説明(難しい・長い・人によって説明が異なる・機械の音で聞こえない・学生にも考える時間が欲しい等)』『質問(質問時間が少ない・分からないと言われると不安になる等)』『その他(プリントを配布した方がよい等)』に関する指摘事項が合計14件記載されていた。しかし、平成26年度以降は『分かりやすい説明だった・出来ないときはヒントをくれた・考えさせてから説明するので頭に入ってきやすかった』『質問しやすかった・質問時間がたくさんあってよかった・丁寧に質問に答えてくれた』『プリントがあり分かりやすかった』等、前年度までの指摘事項改善に関する具体的な意見が合計34件記載されていた。加えて、平成28年度アンケートにおいては指摘事項が1件も記載されていなかったこと、および学生の実習満足度評価も年を重ねるごとに良くなったこと(第1図)より、平成24年度から繰り返し行ってきた実習教育効果向上サイクルの成果が表れているものと考えられた。

【今後の展望】

実習教育効果向上サイクルを続けることで、入来牧場の実習教育スキルは確実に上昇していると考えられる。今後は、学生が指摘事項を記載しやすいアンケート方式を再検討することで、改善点の抽出と共に恒常的な自己チェック体制を構築していきたい。また、このサイクル以外にも、九州大学・佐賀大学・宮崎大学への実習視察(写真1)および九州大学との実習教育発表(共同アンケート調査)(写真2)等を行っており、他大学とも連携を取りながら多様な実習内容および実習教育スキルの蓄積を図りたい。実習期間中の技術習得を評価する指標は難しいものであるが、これらの取り組みを継続して行うことが、職員の成長延いては実習教育効果の向上に繋がっていくものと考えている。

第1表 入来牧場における年間実習計画

実習	対象	実習期間	備考
生物生産学特別実習	生物生産学科 1年生	2泊3日	2回/年
農場実習Ⅰ	家畜生産学コース 2年生	4泊5日	1回/年
農場実習Ⅱ	植物生産学コース 2,3年生	1日	4回×2/年
農場実習Ⅲ	家畜生産学コース 3年生 食品機能化学コース 3年生	3泊4日	2回/年
人工授精師講習会	家畜生産学コース 4年生	1泊2日	1回/年
獣医臨床基礎実習	共同獣医学部 4年生	4泊5日	1回/年



第1図 農場実習Ⅰにおける学生の实習満足度評価の推移



写真 1-1 九州大学実習風景



写真 1-2 佐賀大学実習風景



写真 1-3 宮崎大学実習風景



写真 2 実験実習研究会協同発表